

地域主体の生涯学習の下地を持つ京の町に、 21世紀の人づくりの範を見る



国際日本文化研究センターで河合隼雄氏とともに

PROFILE

にしおか しょうこ

京都府立大学卒業後、アメリカ合衆国州立インディアナ大学大学院に留学。成人教育学を学び、教育学修士取得。その後、アメリカ合衆国オハイオ州立大学大学院教育学部にて成人教育を研究。同大学国際研究室研究員を務めた後、佛敎大学に勤務。大学における教育・研究の一方で、京都府生涯学習審議会委員、京都府エイズ専門委員会委員、京都市人づくり21世紀委員会顧問、滋賀県人権施策推進懇話会委員など、懇話会や審議会の委員として、あるいは各種アドバイザーとして、社会との関わりを大切にした活動にも力を入れている。主な著書に、『生涯学習』（共著、ミネルヴァ書房）、『生涯学習論』（共著、実務教育出版）、『最新アメリカの生涯学習』（共著、川島書店）、『生涯学習の創造—アンドラゴジーの視点から—』（単著、ナカニシヤ出版）がある。

いわゆる基盤目状に区画された京都の町なかでは、タクシーに行き先を告げるとき、あるいは手紙を出すときなど、場所を示すのに「四条堀川上る」と「通り」を基準に表します。それだけに、京都の町なかで暮らすためには、通り名を把握していることが必須となります。では、京都の人々はどのようにして、通り名を覚えるのでしょうか？

今月は、教育学部生涯学習学科の西岡正子先生に、江戸時代から伝わる都人の智慧をテーマに京の町を案内していただきます。

江戸時代から歌い継がれた『京の通り名唄』

「丸・竹・夷・二・押・御池……」。これは、京都の町の通り名を口ずさみやすく組み合わせた覚え唄で、『京の通り名唄』と呼ばれています。ちなみにこのフレーズは、丸太町通、竹屋町通、夷川通、二条通、押小路通、御池通と、東西の通りを北から順に追っています。

社会教育・生涯教育が専門の西岡先生は、以前、京都における社会教育の歴史について論文にまとめる際、この「京の通り名唄」を取り上げられたことがあるそうです。その時、佛教大学生191名を対象にアンケート調査を行ったところ、「育った場所」と「通り名唄を聞いた経験」との間には密接な関係があることが判明。さらに、「どのような状況で聞いたのか」という質問に対しては、「京都育ち」の6割が祖父母・両親から聞いており、家庭での伝承がまだ生きていることがわかったそうです。そのほか、「ラジオのコマーシャルのBGMで」「車の運転の練習のときに、便利だから覚えるように言われて」等の回答も多く、この唄が生活に密着していることが裏付けられたと、先生は当時を振り返ります。

「そうしたアンケート調査と並行して『使用謡』について調べました。その時には、大杉先生に随分お世話になりました」。

大杉先生とは、京都市学校歴史博物館の研究主任を務めておられる大杉隆一氏のことです、以前にも『佛大通信』にご協力いただいたことがありますが(平成12年5月号、「ユニークな町名や自治組織に、京の町衆の気概を思う―前編―」へP.126・130参照)。実は、西岡先生は学校歴史博物館の基本構想委員会のメンバーで、開設に先立って具体的なプランニングを進めてきたうちのお一人。教育に関わる古文書のことなら、学校文化財の収集・保存に東奔西走される大杉先生にお尋ねするのが一番と、『使用謡』について相談したところ、なんと、複写を入手することができたそうです。

『使用謡』は、江戸時代以降、町会所で教義に用いられていた教本で、九九や日本の地名、針灸術のつば、8歳以降の社会交際のマナーや身だしなみなど、実用的な知識に節をつけた謡15曲が収載されています。その15曲のなかに、『京の通り名唄』のオリジナルである『九重』も収載されてい

るのです。西岡先生によれば、京都では室町末期あたりから、謡の専門家である猿楽者以外の人々にも謡が普及し始め、貴族たちの必須の教養であったばかりでなく、武家や町家の上層階級の間でも謡を楽しむ謡講と呼ばれる集まりが組織されていたとのこと。先生が当たった先行研究のなかには、すでに江戸時代の中頃には「ト丸・竹・夷・二・押・御池……」と節を付けて謡う覚え方が京都人の常識になっていたとみる説もあったそうです。

現代版の町会所!? 「学校ふれあいサロン」

「寺子屋や私塾などにおける庶民に対する教育が早くから普及していたことや、町組の集会所である町会所において、町組を中心とした地域の教育が行われていたことなどを見てもわかるように、京都は平安遷都以来、日本の文化・教育の中心を占め、学びの場として特別な位置を保ち続けてきました。そして、それらの伝統を礎にした学びの気風が、現在の京都にも息づいていると思います」。これからの日本における社会教育・生涯教育のあり方を考えるうえでの大きなヒントが、京都の

町には秘められていると語る西岡先生は、「京都市人づくり21世紀委員会」の顧問を務めておられます。「人づくり21世紀委員会」とは、「子供たちが未来に輝くために、大人としてできることから始めよう」との京都市長の呼びかけからスタートした活動で、幅広い分野77団体が参加しています。「人づくり」をテーマにした様々な活動のなかでも、西岡先生が着目しているのが「学校ふれあいサロン」。これは、児童数が減少を続けるなか、小学校に生じた空き教室を地域に開放し、地域住民の会合や生涯学習活動に活用してもらおうという試みで、お茶席、書道教室、手話講座など各校ごとに特色ある活動が展開されています。

現状に決して満足しない

創造性に満ちた京都のまち

「人づくり21世紀委員会」の運営には、西岡先生を含めた6名の顧問の先生方に加え、河合隼雄氏代表として参画されているそうです。河合氏といえば、小渕前首相が委嘱した「21世紀日本の構想」懇談会の座長を務められ、今年1月に提出された最終報告書の「20世紀が【組織の世紀】だった

たとすれば、21世紀は【個人の世紀】となるだろう」との一節が世間の注目を集めたのは記憶に新しいところだ。

実は今回、京都における社会教育のあり方を探るにあたって河合氏の見解が聞きできればと、特別にお時間をとっていただいているとのこと。早速、国際日本文化研究センター（略称：日文研）に河合氏を訪ねました。

学術研究の世界での功績はもとより、重要な公役を兼任されるなど多方面でのご活躍ぶりから、かなり厳峻な空気を想像していましたが、ユーモアとウィットに富んだ河合氏のお話には、笑い声が絶えない対談となりました。

話題が「個性の育成」に言及すると、「そういえば、以前出席した会議で、“個性を育てる教育のために、皆が一丸となつて取り組んでいます”とある教育者が話していましたよ（笑）」と、受け皿である教育システムや教育者の意識がついていけない点を指摘される場面もありました。また、京都の町には、子どものためによりよい教育を自分たちの力でつくり出していこうという気風があるとの話になると、日文研の10周年の時の職員の

方とのやりとりを披露。職員の方たちに対して「続けていくことに意義があるのではない。常にクリエティブでなければならぬ」と述べたあと、「皆には内緒にしていたけど、日文研の建物の地下にダイナマイトが仕掛けてあって、所長室にスイッチがある。クリエティブでなくなったら、いつでもスイッチを押して爆破するぞ」とジョークを付け加えると、職員に「所長、そんなに発破をかけないでくださいよ」と切り返されたとのこと。「日文研の職員さんは、ユーモアセンスがないと務まらないですね」と西岡先生も笑顔で返します。

1時間あまりの対談を終えて帰路につかれた西岡先生は、「笑いのなかにも、“学問・研究は守りになつてはいけない。常に攻めの学問・研究でなければいけない”など熱いメッセージがあり、教育・研究の神髄にふられた思いがしました」と、感動を隠せない様子でした。

『佛大通信 Vol.422』（平成12年11月号）掲載

地域主体の生涯学習の下地を持つ京の町に、
21世紀の人づくりの範を見る

■国際日本文化研究センター

日本文化に関する国際的・学際的な総合研究と世界の日本研究者に対する研究協力を行うことを目的として、昭和62年（1987）5月に、文部省所管の大学共同利用機関として設立された。大学院関連の活動としては、総合研究大学院大学文化科学研究科国際日本研究専攻が置かれており、博士課程の学生を受け入れて研究者養成を行うほか、他大学の大学院生・外国人留学生を受け入れて研究指導も行っている。

■河合 隼雄（かわい はやお）

昭和27年京都大学理学部卒。昭和37年から40年までスイスのユング研究所に留学、昭和40年日本人初のユング派精神分析家の資格を取得。日本におけるユング分析心理学の理解と実践に貢献し、ユング派にとどまらず、わが国の臨床心理学および心理療法に画期的な新展望を開いた。